



みんなの「なんな一の？」を伝えるこども記者のための新聞(毎月1回発行)



信毎こども記者ニュース

こども記者クラブ(信濃毎日新聞地域活動部) 〒380-8546 長野市南県町657
TEL 026-236-3110 FAX 026-236-3193 電子メール t-chiiki@shinmai.co.jp

no.60

梅雨入りももうすぐ。雨の日に、本やまん画を読むのが好きな人はいるかな。今回は、「精霊の守り人」「獣の奏者」などを書いている作家で、5月5日のこども新聞特別号にメッセージをよせてくれた上橋菜穂子さん(51)＝千葉県我孫子市＝の「外伝」です。特別号にのりきらなかったお話をどうぞ！

上橋さんは東京都出身。小さいころ、夏休みには上水内郡信濃町の母方の祖母の家に来て、いとこ達とたくさん、遊んでいました。現在、川村学園女子大学特任教授。文化人類学者として、オーストラリアのアボリジニを研究しながら、物語も書いています。



上橋菜穂子さん



お母さんのひざにあわる、小さいころの上橋さん。父方のおばあちゃんもいっしょ



国際アンデルセン作家賞の受賞が決まり、開いた記者会見の様子



上橋さんの作品を元に、劇を作ったドイツの小学生と＝2008年、ベルリン



アボリジニの人たちがとったトカゲ。土の中で乾し焼きにしたそう＝1992年ごろ、オーストラリア西部ポートヘッドランド近く

小説を書いて、大変な時は？

「出てこない時」。私は頭の中に降ってくるイメージから書いていくので、出てこない時はひたすら苦しみ、「本当にこれだ」というものが来るしゅん間まで、1ページでも、一生けん命書こうとします。

9月に出す新作は、出ただけで7回、書き直しました。「獣の奏者」は早かったですよ。主人公のエリンがやみの中、がけの上に立ち、下から風がふき上がっている。このイメージが、ここ(取材場所の川村学園女子大学)のうらを運転している時に降ってきました。

まん画や本をかく人になりたい！今何ができる？

自分が気になることを、何でもかんでも集めてみて。本、映画、まん画…いっぱい読んで、感じ、自分の中にためていく。私も「どうしたら物語をかく人になれるか」と思い続け、「本禁止令」が出るほど読みまくってましたよ。

そして、いろんな経験をする。私は、信濃町で自然いっぱいの遊びをしたことなど、たくさん経験を、細かいところまで覚えています。そうやって、小さいころから心の中にためてきたものが今、宝物になっています。

書く時は、どんな感じ？

シーンが頭にうかび、においまで感じながら書いています。「どう書いたら、読む人にこの感じを伝えられるだろう」と、文章で頭の中をデッサンしている感じかな。

書いていて楽しい時は？

「これってだれが書いたの？」と思うようなものができた時。その喜びはすごいですよ！

カッパに会った？

中学1年くらいの時のことです。信濃町の野尻湖に通じる川でつりをしていました。夕方、いとこたちも帰ってしまい、一人で糸をたらしていたら、とつ然、ぐぐぐーっと、糸がすいこまれました。深くなっていて底が見えず、絶対一人で泳いではいけない、といわれていた場所。こわかったのですが、「何だろう」とさおを引いたら…「グエッ」。でかいカエルがつぶされたような変な音がして、糸がぶつつり切れ、飛んできたつり針が足にささってしまいました。それがひどくはれて痛み、ひざが曲げられないほどに。「カッパにやられたかー」。いとこたちには「ちげーよ」とばかにされたりしましたが(笑)、あの時の「クエッ」という音は、今も耳に残っています。